

静岡県立美術館

第三者評価委員会評価報告書

平成 29 年 3 月

静岡県立美術館第三者評価委員会

目次

はじめに	1
------------	---

【報告編】

1 静岡県立美術館第三者評価委員会について	2
2 平成 27 年度 静岡県立美術館第三者評価委員会評価総括表	5
2-1 基本方針別自己評価	6

【資料編】

1 展覧会に関する自己点検評価表（平成 27 年度）	11
2 調査・研究に関する自己点検評価報告書（平成 27 年度）	17
3 定性評価の状況（平成 27 年度）	28
4 静岡県立美術館評価業務 報告書（平成 28 年 3 月）	39
5 平成 27 年度第三者評価委員会での意見と対応状況	123
6 平成 27 年度設置者の取組状況	125

はじめに

本委員会は、評価を通じて静岡県立美術館の自律的かつ継続的な運営改善を推進することを目的として、平成 18 年 9 月に発足しました。

本委員会の使命は三つあります。第一は、県立美術館が自ら行う自己評価（一次評価）に対して、外部の視点から二次評価することです。第二には、美術館に対する県庁（本庁）の支援体制を委員会が独自の視点に立って評価することです。第三は、美術館の運営及び評価の方法について、次年度の改善に向けた提言をすることです。

本年度の活動としては、平成 28 年 8 月に第三者評価委員会を開催し、平成 27 年度の美術館自己評価に対する二次評価、設置者の取組に対する意見、今後の改善課題について討議しました。この報告書はその結果に基づき作成したものです。

本報告書が県庁と県立美術館のますますの発展と充実に資することを願います。

平成 29 年 3 月

静岡県立美術館第三者評価委員会

委員長 村田 眞宏

1 静岡県立美術館第三者評価委員会について

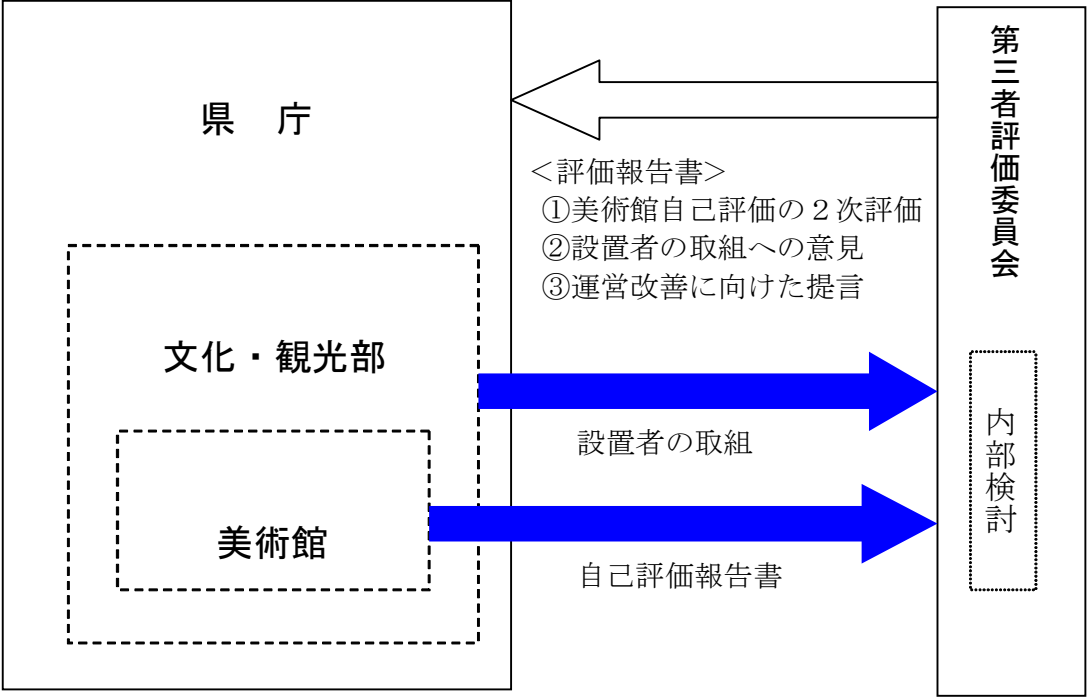
静岡県立美術館第三者評価委員会委員名簿（敬称略、五十音順）

	候補者	役 職
委員長	むらた まさひろ 村田 眞宏	豊田市美術館館長
委員	かみやま まり 神山 眞理	日本大学教授
〃	きんばら ひろゆき 金原 宏行	豊橋市美術博物館アート・アドバイザー
〃	たなか ひらき 田中 啓	静岡文化芸術大学教授
〃	さくらい とおる 櫻井 透	株式会社静岡銀行顧問 静岡商工会議所副会頭
〃	やまぐち ゆみ 山口 裕美	山口裕美コンテンツ・ラー・アートラボ代表

平成 28 年度の活動

会議名等	内容等
第 1 回第三者評価委員会	日時：平成 28 年 8 月 3 日（水）14:00～16:30 会場：静岡県立美術館 講座室ほか 内容：（1）平成 27 年度の取組に対する評価 （2）企画展視察

評価システム全体図（第三者評価委員会の位置付け）



静岡県立美術館第三者評価委員会設置要綱

(設置)

第1条 静岡県立美術館（以下「美術館」という。）では、より良いサービスの提供を図るため、事業の運営等の効果について、多面的かつ客観的な測定・評価を行う自己評価活動を実施しているが、美術館の自律的かつ継続的な運営改善を推進するため、美術館の自己評価及び県庁の支援体制等を第三者の視点から評価する「静岡県立美術館第三者評価委員会」（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会は、次に掲げる事項を所管する。

- (1) 美術館の自己評価に対する2次評価
- (2) 県庁の支援体制等に関する評価
- (3) 評価結果の報告及びそれに基づく美術館の運営改善に向けた提言
- (4) その他、この委員会の目的達成に関すること

(委員)

第3条 委員は、知事が委嘱する。

2 委員の人数は、10名以内とする。

3 委員の任期は2年とする。ただし、その委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 委員は、再任されることができる。

(委員長)

第4条 委員会に、委員長1人を置く。

2 委員長は、知事が指名する。

3 委員長は、会務を総理し、会議の議長となる。

(会議)

第5条 委員会は、委員長が招集する。

2 委員会は公開とし、その傍聴に関して必要な事項は、別に定める。

3 委員会は、必要に応じて個別課題検討のための分科会を置くことができる。

4 委員会及び分科会には、委員以外の者に出席を求めることができる。

(事務局)

第6条 委員会の事務を処理するため、事務局を静岡県文化・観光部文化政策課内に置く。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

1 この要綱は、平成18年9月21日から施行する。

2 この要綱の施行の日に委嘱する委員の任期は、第3条第3項の規定にかかわらず、平成20年3月31日までとする。

(最終改正 平成23年6月17日)

2 平成27年度静岡県立美術館第三者評価委員会評価 <2 総括表>

【使命】 = 美術館のめざす姿
 静岡県立美術館は、創造的で多様性に富んだ社会を実現していくために存在します。そのためにコレクションを基盤として人々が美術と出会い新たな価値を見出す体験の場をより多く提供するとともに、地域をパートナーと考える経営を行い、日本の新しい公立美術館となります。

基本方針	計画(P)			実施状況(D)	評価(C)	
	重点目標	評価指標	目標	実績	自己評価	第三者評価
A 人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します	1 県民の視点に立ち「静岡らしさ」を表現できるよう、文化資源を十分活用した展覧会事業を展開します	1 展覧会の観覧者数(人)	140,000 人	114,956 人	【成果】 ・他の美術館・博物館と連携した学芸員の共同研究による企画展、学芸員の調査研究による自主企画展、新規来館者の獲得を目的とした斬新な切り口の展覧会、コレクションを研究し活用した収蔵品展など、様々な視点から展覧会を開催した。 ・展覧会の定性評価においては、研究活動評価委員から一定の評価を得ることができ、また一方で来館者に関する評価指標では、満足度において高い数値、評価を得た。	①観覧者数の目標達成のためには文明展の開催などの努力が必要である。(金原19) ②収蔵品を有効に活用した展示を行えば、県立美術館ならではの集客につながるのではないか。(神山20) ③新進の若手のアーティストを他館に先んじて紹介し、作品価格が安い時点で購入するといった作品の収集方法を検討してはどうか。(山口23) ④より多くの寄贈を受けることができるよう、寄贈作品を展示する際は寄贈者の名前を大きく掲示するなどの工夫をすべきである。(金原41) ⑤寄贈も作品収集の手段の一つではあるが、体系的なコレクションの形成には作品の購入が必要である。(村田43)
		2 自主企画・企画参加型の展覧会の回数(回)	4 回	3 回	【課題】 ・展覧会の来館者数が目標値を下回ったが、定性評価、来館者満足度の指標数値は、ともに高いため、今後は目標値の達成に努めることが課題である。 ・研究会の継続的な実施など、学芸員の研究活動に力を入れてきているが、それを展覧会や教育普及活動として、さらに充実させていくことが課題である。 ・作品収集については、近年の寄贈の増加と充実が顕著ではあるが、購入予算の確保が重要であり、課題である。	
		3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)	88.0 %	84.7 %		
		4 展覧会における新規来館者の割合(%)	20.0 %	19.8 %		
		5 収蔵品展の観覧者数(人)	12,000 人	11,610 人		
		6 収蔵品の公開件数(件)	500 件	343 件		
		7 展覧会に対する外部評価【定性】	—	別添		
	8 内部セミナー・研究会・研修の回数(回)	14 回	10 回			
	2 他の美術館・大学・地域の専門機関と連携し、新たな公立美術館の姿を示します	9 他の美術館や大学と連携した取り組み件数(回)	5 回	5 回		
		10 公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート【定性】	—	別添		
		11 調査研究の発表回数(回)	15 回	10 回		
	3 調査研究を美術館活動の基盤と考え、成果を広く公表することで質の向上を図ります	12 作品購入件数・価格(件・千円)	— 千円	— 千円		
		13 作品寄贈件数・価格(件・千円)	10 件	3 件 6,560 千円		
		14 調査研究に関する外部評価【定性】	—	別添		
B 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します	1 美術館の役割を明確にし、業務の再構築等を図るとともに、学校・県民のニーズを先取りするプログラムを開発、普及します	15 学校教育と連携した取り組み数(件)	300 件	259 件	【成果】 ・教育普及全体の利用者は、27,576人で、いずれのプログラムの利用者満足度も高い。 ・作品の鑑賞やコレクションを意識したプログラムを実施し、利用者から「作品の見方が変わった」「作品に親近感が持てた」といった好意的な声が寄せられた。 ・日本平動物園、セハ(商業施設)、草薙商店街、静岡大学、静岡県立大学等との連携によって、利用者サービスの充実、美術館活動の活性化を図ることができた。 【課題】 ・教育普及プログラムは、静岡市内からの参加者が多く、市外からの参加者を増やすことが今後の課題である。 ・新規の参加者を獲得するための教育普及プログラムを検討することが課題である。 ・将来展望を含め、美術館を中心とした街づくりに積極的に参画していくことが課題である。	①大学との連携においては、人文、芸術系の学部だけでなく、理系の学部も対象とする。広くリベラルアーツ教育を担うため、県内大学のネットワークと連携して、県の貴重なコレクションや学芸員の人的財産を有効活用する(櫻井) ②レプリカの貸し出しについては、今後非常に効果的な結果が出るのではないかと。また、貸出対象を小中学校に限らず、大学まで広げるべきである。(神山25) ③大学への営業活動においては、個々の教員に対しても、授業やゼミにおいて美術館を訪れるよう働きかけをすべきである。(神山26) ④大学等の教育機関との連携を深めていく中で、講座やシンポジウムの開催を積極的に行うことにより、博学融合が実現できると思われる(金原32) ⑤友の会は内向きすぎないか？会員に一般の部と法人の部を設け、現役世代も取り込んで、構成員、活動内容の多様化を図り、ボランティアともども、積極的に美術館を支える組織にしたい。(櫻井) ⑥企業からの支援獲得のためには、企業側にとっての美術館支援の理由付けが必要。「福利厚生」(静岡銀行の施設利用券配布など)や企業の社員研修あるいは取引先などの会合への講師派遣など、提供できる多様なメニューを提示しながら支援をお願いしたらどうか？(櫻井)
		16 鑑賞系プログラム数(件)	19 件	23 件		
		17 コレクションを活用したプログラム数(件)	19 件	21 件		
		18 普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート【定性】	—	別添		
	2 静岡県立美術館の活動をアピールする普及事業を開催します	19 講演会等の開催件数(回)	160 回	166 回		
		20 学芸員のフロアレクチャー等の数(回)	120 回	98 回		
	3 地域住民、企業、友の会、ボランティア等との連携を深化させ、美術館を核とした地域づくりに努めます	21 地域住民等と連携した取り組み数(件)	6 件	9 件		
		22 館内空間を生かした催事の件数・参加者数(件・人)	90 件 5,000 人	54 件 7817 人		
		23 地域空間、住民等と連携した取組に関する職員レポート【定性】	—	別添		
	C さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます	1 県民が「静岡県の誇りと自慢できる美術館」を目指し、様々な戦略的広報を発信していきます	24 美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合(%)	70.0 %	70.6 %	
25 ホームページのアクセス件数(件)			600,000 件	245,000 件		
26 ホームページの満足度(%)			75.0 %	70.7 %		
2 観光業界等と連携した新たな広報手段を開拓し、県立美術館の魅力を積極的に広報します		27 観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数(件)	5 件	8 件		
		28 広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート【定性】	—	別添		
3 ロダン館、富士山絵画を「静岡県立美術館の顔」としてその魅力を発信していきます		29 ロダン館の入場者数(人)	80,000 人	67,821 人		
	D 常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます	1 お客様の満足度を高める施設を目指し、環境整備に努め、利便性を高めます	30 美術館利用者数(人)	264,800 人	266,856 人	【成果】 ・美術館利用者数は、26万人を超え、目標利用者数を達成することができた。 ・レストラン・カフェ、ミュージアム・ショップ、駐車場において、来館者の満足度を高める取組を実施し、成果を得た。 ・来館者の安全を守るために、防災・防犯に関する機器整備を行い、また施設の整備・管理に力を入れた。 【課題】 ・閉館30年が経過して施設の経年劣化が著しく見られるので、今後は、リニューアル計画の策定が課題である。 ・駐車場、レストラン・カフェの満足度が目標に達しなかったことについて、今後は来館者ニーズを把握し、改善策を見出すことが課題である。 ・「県民に愛される美術館」を目指して、施設の改善に取組んでいくことが今後の課題である。
31 来館者のアクセス満足度(%)※再掲 ※上段:公共交通機関利用、下段:自家用車利用			80.0 %	76.0 % 78.3 %		
32 レストラン・カフェに対する満足度(%)			75.0 %	65.7 %		
33 ミュージアムショップに対する満足度(%)			85.0 %	92.1 %		
2 施設再始動検討を始め、より県民に愛される美術館を目指します		34 鑑賞環境に対する満足度(%)	90.0 %	90.8 %		
		3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)※再掲	88.0 %	84.7 %		
		21 地域住民等と連携した取り組み数(件)※再掲	6 件	9 件		
	30 美術館利用者数(人)※再掲	264,800 人	266,856 人			
		32 レストラン・カフェに対する満足度(%)※再掲	75.0 %	61.2 %		
		33 ミュージアムショップに対する満足度(%)※再掲	80.0 %	92.1 %		

設置者の取組	取組の状況	第三者評価委員意見
	<ul style="list-style-type: none"> 第3期文化振興基本計画の推進に向けて、美術館の企画運営への参画、県庁が持つ広報媒体の情報提供や技術支援を行った。 「県有施設による文化振興推進会議」の発足などを通して、他の県立施設や周辺施設との間の連携を強化した。 県内中学生を対象とする芸術鑑賞推進事業を実施し、美術館において展覧会を鑑賞する機会を提供した。 電気、機械設備の更新を計画的に実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> ①予算編成における指標として来館者数を用いる場合、前年度のみ来館者数ではなく、3年から5年程度の間の平均値を用いるべきである。(田中21) ②広報活動にあたっては、専門的な職員の配置や、県庁の広報担当課との連携を行うことが必要である。(金原31) ③収蔵庫容量も考慮したうえで、コレクションの再編成を行うべきである。(山口42) ④館のマネジメントは、組織的に「経営」として行うことが重要である。そのためには、アートマネジメントのできる人材の確保が必要である。(櫻井) ⑤県や美術館が持つ館の将来像の中で、評価をどのように生かしていくかを検討したうえで、現状のあり方をいかに改良し、維持していくかを考えるべきである。(田中41) ⑥地域社会や静岡県内における美術館の今後のあり方を早急に検討し、増改築等の計画を作るべきである。(村田44)

基本方針	A 人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します
------	--

計画(P)			実施状況(D) H28.3.31現在		評価(C)	
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価	
1 県民の視点に立ち「静岡らしさ」を表現できるよう、文化資源を十分活用した展覧会事業を展開します	1 展覧会の観覧者数(人)	140,000 人	114,956 人	◆は、自主企画・企画参加型展覧会。 ※収蔵品の公開件数は、 ・収蔵品展(7室+名品コーナー) <206件> ・企画展「富士山-信仰と芸術-」<14件> ・企画展「写真家の眼/版画家の眼」<27件> ・他館への貸出件数 <96件> を合計したものである。	【成果】 ・県民にもよく知られている写真家の展覧会、当館初のころみとなったデザインの展覧会、富士山を信仰と芸術の両面から掘り下げる展覧会、収蔵品を活用した展覧会、そして、西洋の風景画の生成と展開を追う展覧会まで、多種多様な展覧会を開催できた。 ・観覧者の展覧会に対する満足度も、例年と同様に高い。 ・新規来館者の割合は、昨年度より低くなったが、「富士山展」新規来館者のうちの43%が県外からの新規来館者であったことは特筆されよう。昨年度も日本絵画の展覧会の新規来館者の56%が県外からの来館者である。県外の日本絵画愛好者には当館のイメージはよい。 ・展覧会内容は、高い外部評価を得た。 ・収蔵品展動員数は昨年度よりも3,000人増加し、1万人台を回復した。多くの寄贈をうけて開催した春の新収蔵品展だけで、前年の倍以上の900人の観覧者を得たほか、夏期の収蔵品展「白の表現力」をはじめ、「西洋の絵画-画材とともに」「妙法華寺の名宝」が好評を博した。 ・移動美術展のうち、浜松市秋野不矩美術館では、NPO法人キッズアートプロジェクトと連携し、「移動美術展」と「キッズ美術展」を開催し好評を得るとともに、入館者数増につなげることができた。 ・企画展広報では、大学との連携に力をいれた。静岡文化芸術大学・静岡県立大学等(スイスデザイン展)、ふじのくに地域・大学コンソーシアム(富士山展)、静岡県立大学(ウィーン美術史美術館展)で特別授業や、授業の一部を借りて、展覧会PRを実施した。 また、静岡市による高齢者大学「みのり大学」の3回の授業をとおして、ロダン館、「富士山展」のPRをした。 ・「写真力」や「ウィーン美術史美術館展」では、静岡市中心部の商業施設や映画館とのタイアップ企画を実施したほか、草薙の地域住民とのイベントなどや街づくり協議会で、展覧会紹介や招待券を配布するなどしてPRIにつとめた。 ・会期中からの広報活動も予算の許す範囲で新聞折り込みチラシの配布や、経費のいらないフェイスブックの発信、フロアレクチャーの追加実施を行った。 【課題】 ・上記のような広報活動を試みたが、観客動員数では、目標を達成できなかった。 ・アンケートからは、ここ数年、当館来館者は「心がやすらぐ」場を、美術館に求めている。当館が従来実施してきた、「新たな感動をもたらす」、知的好奇心を刺激する展覧会のほかに、「心がやすらぐ」展覧会、「構えずにほどよく楽しめる」展覧会を、年間の展覧会構成のなかに組み入れることを検討する。	
		篠山紀信展 写真力(62日間)	45,000 人			38,577 人
		スイスデザイン(38日間)	13,000 人			15,337 人
		◆富士山-信仰と芸術-(33日間)	15,000 人			13,404 人
		ふじのくに芸術祭(14日間)	9,000 人			6,806 人
		◆写真家の眼/版画家の眼(26日間)	6,000 人			4,126 人
		◆ウィーン美術史美術館展(77日間)	35,000 人			20,450 人
		収蔵品展	12,000 人			11,610 人
		移動美術展	5,000 人			4,646 人
		2 自主企画・企画参加型の展覧会の回数(回)	4 回			3 回
		3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)	88.0 %			84.7 %
		4 展覧会における新規来館者の割合(%)	20.0 %			19.8 %
		5 収蔵品展の観覧者数(人)	12,000 人			11,610 人
		6 収蔵品の公開件数(件)	500 件			343 件
	7 展覧会に対する外部評価【定性】	—	別添			
2 他の美術館・大学・地域の専門機関と連携し、新たな公立美術館の姿を示します	8 内部セミナー・研究会・研修の回数(回)	14 回	10 回	【成果】 ・8については11と同内容。 ・9については、以下の5件。①山梨県立博物館との「富士山展」開催。それぞれの館の強みをいかすことができた。②昨年同様静岡大学とのアートマネジメント人材育成事業への協力。③静岡大学のロダン館活用授業への協力 ④静岡県博物館協会事務局としての活動。⑤静岡県立大学の協力をえてロダン館鑑賞用アプリの開発および授業での展覧会PR。 【課題】 ・静岡大学との提携の一部は、文化庁補助金によるものであり、継続性に問題がある。		
	9 他の美術館や大学と連携した取り組み件数(回)	5 回	5 回			
	10 公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート【定性】	—	別添			
3 調査研究を美術館活動の基盤と考え、成果を広く公表することで質の向上を図ります	11 調査研究の発表回数(回)	15 回	10 回	【成果】 ・館長出席のもと、学芸員による研究会をほぼ毎月のペースで実施し、コレクションについての研究を深めた。 ・今年度は、これからの美術界をリードしていく現代美術作家の作品を寄贈いただいた。 ・寄贈が、質と量ともに充実してきており、当館コレクションの核となりつつある。 【課題】 ・充実したコレクション形成には、学芸員の研究の継続と深まりが重要である。 ・購入についての継続的な予算化を図るとともに、寄贈についても、質の高い作品を収集していくことが今後も課題である。		
	12 作品購入件数・価格(件・千円)	— 件 千円	— 件 千円			
	13 作品寄贈件数・価格(件・千円)	10 件	3 件 6,560 千円			
	14 調査研究に関する外部評価【定性】	—	別添			

基本方針	B 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します
------	--------------------------------------

計画(P)			実施状況(D) H28.3.31現在		評価(C)
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価
1 美術館の役割を明確にし、業務の再構築等を図るとともに、学校・県民のニーズを先取りするプログラムを開発、普及します	15 学校教育と連携した取り組み数	300 件	259 件	※プログラムの内訳は、別紙。 ・学校向け事業では「粘土・絵の具教室」「粘土貸出」などの図画工作科指導要領上の「造形遊び」分野への需要が高い。 ・学校向け「粘土・絵の具教室」、一般向け「粘土・絵の具開放日」利用者が、展示室観覧へつながるよう、企画や広報の方法を工夫している。 ・一般向けプログラムでは、企画展や収蔵品展の内容とかわりをもたせることで、参加者にとって満足度が高いワークショップを展開できた。 ・平成27年度より、当館作成のアートカード貸出事業を運用開始。	【成果】 ・教育普及全体の利用者数27,576人 ・講義系、体験系、一般向け、学校向けと各分野バランスよく展開することができ、活動参加者の満足度も高い。 ・実技系ワークショップについても鑑賞やコレクション活用を意識したプログラム開発を行い、参加者からも「作品の見方が変わった」「作品に親近感をもてた」との好意的な意見が寄せられた。 ・本年度から開始したアートカード貸出事業に対しては、学校からの関心も高く、教員研修会を含む15団体約1,500名の利用があった。 【課題】 ・一般向け、学校向けともに、静岡市民の利用が中心で、静岡市外の地区からの利用が少ない。今後は、静岡市外からの参加者を増やしていくことが課題である。 ・「粘土・絵の具開放日」「粘土・絵の具教室」など、人気で集客力のある活動が、必ずしも展示室への集客につながっていない実態がある。 ・新規利用者層の開拓を目指した、教育普及事業の展開。 ・県立美術館のアートカード貸出事業の存在を知らない学校も多く、継続的に、各地区の教育委員会等での広報活動を行っていきたい。
	16 鑑賞系プログラム数	19 件	23 件		
	17 コレクションを活用したプログラム数	19 件	21 件		
	18 普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート【定性】	—	特記事項		
2 静岡県立美術館の活動をアピールする普及事業を開催します	19 講演会等の開催件数	160 回	166 回	※数値内訳 20=学芸員による美術講座+鑑賞講座+フロアレクチャー+オリエンテーション+出張美術講座 19=上記+特別講演会+シンポジウム+ボランティア等によるギャラリートーク	【成果】 ・全体の開催件数は昨年度並みの数値となった。講座等の聴講者数は増加傾向にあり、利用者のニーズに応える内容であったと推測される。(例:特別講演会26年度674人→27年度830人、美術講座26年度173人→27年度214人) ・館外での美術講座や映画館シネ・ギャラリーとのコラボレーション企画など、外部との連携による普及活動の広がりが見られた。 【課題】 ・引き続き多彩な形式による講座や講演会のあり方を検討・試行する。
	20 学芸員のフロアレクチャー等の数	120 回	98 回		
3 地域住民、企業、友の会、ボランティア等との連携を深化させ、美術館を核とした地域づくりに努めます	21 地域住民等と連携した取り組み数	6 件	9 件	・地域住民と連携した取組についての詳細は、【定性レポート】を参照。 ・館内空間を生かした催事については、本館エントランスを使用した「ちょこっと体験」、「ドット若冲」の展示、「めぐりアート」の展示、ロダン館ギャラリートークを実施した。	【成果】 ・地域住民と連携した取組としては、「有度山フレンドシップ協定」参加施設との連携、ムセイオン静岡、静岡大学、静岡県立大学等との共同事業を実施した。 ・館内空間を生かした催事は、ちょこっと体験2,058人、ドット若冲32人、めぐりアート5,135人、ギャラリートーク592人の参加者があり、目標数値を超える成果を得た。 【課題】 ・地域住民と連携した取組については、美術館を核とした地域づくりに努め、様々な取組を定着させるべく努力していくことが課題である。 ・ロダン館内部空間を利用した催事では、他の観覧客が観覧制限を受けたり、普段生じない騒音が発生したりするため苦情が発生するケースがある。催事と観覧客の調整が重要課題となる。
	22 館内空間を生かした催事の件数・参加者数	90 件 5000 人	54 件 7817 人		
	23 地域住民等と連携した取組に関する職員レポート【定性】	—	別添		

基本方針 C さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます

計画(P)			実施状況(D) H28.3.31現在		評価(C)
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価
1 県民が「静岡県の誇りと自慢できる美術館」を目指し、様々な戦略的広報を発信していきます	24 美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合	70.0 %	70.6 %		<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合(%)は、前年度と比べ2.4%減少した。ホームページの満足度(%)についても、2%弱減少している。アクセス件数は、1500件増で、ほぼ前年度並みであった。一昨年7月から開始したFacebookを通じたコミュニケーションが、オンライン上の新たなコミュニケーションツールとして機能しはじめ、話題性のあるタイムリーなニュースや、関心の高い書き込みに対しては、多くの「いいね！」を獲得し、「シェア」も行われている。いいね！の累計は約2,000件。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ホームページは、平成21年度にリニューアルしてから、数値は高めで安定している。平成26年度7月からはFacebookも導入したが、27年度のアクセス数は、微増に留まっている。今後の課題としては、スマートフォンの普及に伴って、スマートフォンに対応したサイトの作成が急がれる。
	25 ホームページのアクセス件数	600,000 件	245,000 件		
	26 ホームページの満足度	75.0 %	70.7 %		
2 観光業界等と連携した新たな広報手段を開拓し、県立美術館の魅力を積極的に広報します	27 観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数	5 件	8 件	<ul style="list-style-type: none"> 観光業界や他のイベントとの広報連携の取り組み「ふじのくに観光大商談会」へH25年度から継続参加「つながるくさなぎフェス」夏・冬へH25年度から継続参加「草薙マルシェ実行委員会主催のマルシェ」H26年度誘致「JR東海アート&トレイン」への参加2年目「静岡大学主催の「めぐるりアート」」へH25年度から参加「篠山紀信展」において、「日本平動物園との共通チケット販売」、「静岡鉄道との共通チケット販売」、「新静岡セノバ」でのミニパネル展、大型タペストリー掲示を実施した。 広報手法における新たな取組状況に関する詳細は、【定性レポート】を参照。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光業界や他のイベントとの広報連携については、「有度山フレンドシップ協定」参加施設による地域を一体とした誘客PR(大商談会)、草薙商店会との連携(つながるくさなぎフェス、マルシェ)、JR東海が実施するイベント等への参加を行った(その成果については、今後、確認する必要がある)。 広報手法における新たな取組状況については、ホームページ、ポスター・チラシ、広報サポーター、Facebook等、様々な媒体を用いて積極的な広報を実施した。それにくわえて、展覧会ごとに、新たな広報に向けた会議やイベントの実施、チラシの配布、新静岡セノバや静岡シネギャラリーとの協力など、様々な取組を実施し、積極的な広報を展開した。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光業界や他のイベントとの広報連携については、美術館単独では静岡県外の誘客を図ることが困難なため、「有度山フレンドシップ協定」参加施設では、各施設を巡る観光ルートマップの作成を進めており、ルートマップの商談会等での活用が課題である。 広報手法における新たな取組状況については、ホームページはスマートフォン対応をしていないため、情報の確認・拡散が難しい。
	28 広報手法における新たな取組状況に関する美術館職員のレポート【定性】	—	別添		
3 ロダン館、富士山絵画を「静岡県立美術館の顔」としてその魅力を発信していきます	29 ロダン館の入場者数	80,000 人	67,821 人	<p>平成26年度に、ロダン館開設20周年を記念しロダン作品32体を擁し国内唯一の常設展示を行う当館の活性化と賑わい創りを目的に、地域や大学等と連携して開催した「ロダンウィーク」を、本年度も「第2回ロダンウィーク」として開催し、例年事業としての定着を図った。</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成27年度の「ロダンウィーク」集客数は、平成26年度の5,000人に対し、6,600人と大幅に増加した。今後もロダン館を中心とした地域の賑わい創りを進めるとともに、平成29年度の「ロダン没後100年」を念頭にロダン館の情報発信を進めていく予定である。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ロダンウィーク(特にマルシェのお客様)参加者を美術館の展覧会へどのように導くかが課題である。 11月3日が中心イベント開催日であり、当日の駐車場対策(公共交通機関の利用促進、鉄道会社と連携した割引チケットの発行他)が課題である。 来客の安全対策、環境整備(ごみ、作品保護等)に取組むことが課題である。 ロダン研究の拠点として、ロダン・ウィークにおける学術発信をしていくことが課題である。 	

基本方針 D 常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます

計画(P)			実施状況(D) H28.3.31現在		評価(C)
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価
1 お客様の満足度を高める施設を目指し、環境整備に努め、利便性を高めます	30 美術館利用者数	264,800 人	266,856 人	・防災・防犯設備について、警備センターの集中監視複合盤を中心に関係機器を更新し、安心安全な環境の整備に努めた。 ・建築及び各設備の大規模改修(リニューアル)計画の具体化に向けて設置した美術館職員の内部検討会において、他館の事例等を報告し、今後の進め方の参考とした。 ・図書閲覧室は施設管理上の理由から閉室していたが利用を再開した。	【成果】 ・レストラン・カフェの満足度は61.2%で目標(75.0%)に達していないが、レストランにおいては、企画展に合わせて特別料理(ミューゼスペシャリティ)を提供するなど、質の高いサービスを提供し、お客様の好評を得ている。 ・ミュージアムショップの満足度は92.1%で目標(85.0%)を上回った。特に企画展に合わせた商品のレイアウトの工夫(スイスデザイン展での展示品と同様のプロダクトなど)を行い、お客様の満足度向上に努めた。 ・当館への利用交通機関で最も多いのは自家用車であり、アクセス満足度は78.3%と目標の80%には達しなかったが、来館者の多いゴールデンウィークやイベント(ロダンウィーク)の際には、隣接する県立大学の職員駐車場を借用し、交通渋滞を招かないように誘導するなどの対応を行った。また駐車場を案内する電光掲示板の表示を更新し、利便性向上に努めた。 ・安心安全な環境づくりのため、防災・防犯に関する機器の更新を行ったほか、必要な改修工事等を実施し、良好な施設・設備の維持管理に努めた。 【課題】 ・当館は開館から30年が経過し、経年劣化等により建築及び各設備に多くの不具合が生じている。このため中長期的には建築及び各設備の大規模改修(リニューアル)計画の具体化に向けて検討する必要がある。短期的には劣化診断結果等をもとに、リニューアル計画の検討状況を踏まえつつ、緊急度の高い施設・設備の修繕等を計画的に実施する。 ・自家用車・公共交通機関ともアクセス満足度は目標を下回った。自家用車利用者のアクセスについては、敷地内に無料の駐車場があるものの、収容台数が約400台と限られているために、週末などに利用者が集中してしまうと、近くの駐車場から順次満車になり、駐車できるまでに時間がかかってしまうという問題がある。公共交通機関を利用される場合についてはお客様からのアクセスに関する問合せに対して、「JR草薙駅から運行する100円バスを利用するのが便利であること」を引き続き周知するよう配慮しているものの、来館者の多い日曜、祝日の運行が30分間隔(土曜のみ20分間隔)であることが影響していると考えられる。今後はバス会社への増便等の協力要請を含め対策を検討する必要がある。 ・レストラン・カフェの満足度は目標に達しなかった。営業を委託している事業者においては、企画展に合わせて特別料理を提供するなど、質の高いサービスの提供に努めているが、一層お客様のニーズの把握に努めることが求められる。
	◆展覧会観覧者数	140,000 人	114,956 人		
	◆移動美術展	2,000 人	4,646 人		
	◆教育普及プログラム参加者数	23,800 人	27,576 人		
	◆ミュージアムコンサート入場者数	200 人	180 人		
	◆県民ギャラリー入場者数	40,000 人	59,350 人		
	◆講堂入場者数	8,000 人	10,932 人		
	◆レストラン・カフェ利用者数	30,000 人	33,287 人		
	◆ミュージアムショップ利用者数	20,000 人	15,217 人		
	◆図書閲覧室利用者数	800 人	712 人		
2 施設再始動検討を始め、より県民に愛される美術館を目指します	31 来館者のアクセス満足度 ※上段:公共交通機関利用 下段:自家用車利用	80 %	76.0 % 78.3 %	施設改善の詳細については、上記を参照。	【成果】 ・様々な取組を実施した結果、美術館利用者数は、26万人を超えることができ、多くの「県民の皆様にも愛される美術館」という目標に近づくことができた。 ・展覧会やレストラン・カフェ、ミュージアム・ショップの満足度は高く、利用者に親しまれている。 【課題】 ・展覧会については、「作品やテーマに興味を持った人の割合」は高かったが、来館者数が目標値に達することができなかったため、さらなる魅力作りが必要である。 ・レストラン・カフェの満足度は、目標値に達することができなかったため、さらなるサービス改善が課題である。
	32 レストラン・カフェに対する満足度	75.0 %	61.2 %		
	33 ミュージアムショップに対する満足度	85.0 %	92.1 %		
	34 鑑賞環境に対する満足度(%)	90.0 %	90.8 %		
2 施設再始動検討を始め、より県民に愛される美術館を目指します	3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)※再掲	88.0 %	84.7 %	施設改善の詳細については、上記を参照。	【成果】 ・様々な取組を実施した結果、美術館利用者数は、26万人を超えることができ、多くの「県民の皆様にも愛される美術館」という目標に近づくことができた。 ・展覧会やレストラン・カフェ、ミュージアム・ショップの満足度は高く、利用者に親しまれている。 【課題】 ・展覧会については、「作品やテーマに興味を持った人の割合」は高かったが、来館者数が目標値に達することができなかったため、さらなる魅力作りが必要である。 ・レストラン・カフェの満足度は、目標値に達することができなかったため、さらなるサービス改善が課題である。
	21 地域住民等と連携した取り組み数(件)※再掲	6 件	9 件		
	30 美術館利用者数(人)※再掲	264,800 人	266,856 人		
	32 レストラン・カフェに対する満足度(%)※再掲	75.0 %	61.2 %		
	33 ミュージアムショップに対する満足度(%)※再掲	80.0 %	92.1 %		

【資料編】

展覧会に関する自己点検評価表（平成 27 年度）

- 1 「篠山紀信」展
- 2 「スイスデザイン」展
- 3 「富士山—信仰と芸術—」展
- 4 「写真家の眼／版画家の眼 6つのアンソロジー」展
- 5 「ウィーン美術史美術館」展

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	篠山紀信展 写真力
------	-----------

期 間	4月11日(土)～6月21日(日) (62日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	泰井良
------	-----

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2014年4月1日(水)
	実績	2014年7月15日(水)

企画		実績・検証	
目的・内容	<ul style="list-style-type: none"> ・1950年代後半から今日に至るまで、写真の第一線を走り続ける篠山紀信(1940-)。時代を見越し、時代に先駆けるその活動は、常に話題をさらい、また賛否両論を巻き起こしてきた。 ・本展は、これまで美術館での回顧展を拒み続けてきた篠山が、50年間にわたり撮影してきた写真を「写真力」という新たなストーリーをもとに世に問う大規模な個展。 ・篠山が「写真の神様が降りてきた」と称する約110点を厳選し、「GOD」(鬼籍に入れられた人々)、「STAR」(すべての人々に知られる有名人)、「BODY」(裸の肉体、美とエロスと闘い)、「ACCIDENTS」(2011年3月11日、東日本大震災で被災された人々の肖像)の5つのセクションで紹介する。 	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人であれば、誰もが知っている有名人の肖像写真。一見、大衆的に思えるが、篠山紀信の「写真力」によって、それらが力強く、鑑賞者に迫ってくる。大画面の写真を近くで観ることができ、その迫力を感じることができる貴重な機会となる。 ・主なターゲットは、10代～20代の男女、50～60歳代の男女。静岡市内及び首都圏在住者。 	【アンケートにみる特徴】	
指標(数値目標)	観覧者数 45,000人	観覧者数 38,577人	
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 12,412千円 ・歳入 18,058千円 ・特財率 145.5% 	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 12,317千円 ・歳入 16,951千円 ・特財率 137.6% 	
広報戦略 主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・読売新聞社、静岡だいいちテレビとの強力な連携のもとに、大規模な広報を展開する。テレビ、新聞、ラジオを中心に、セノバにおける広報など多様なメディアによって、篠山紀信の世界を広く紹介する。また、篠山紀信氏によるトークショーなど様々なイベントを実施し、本展の普及に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読売新聞社、静岡だいいちテレビの全面的な協力のもとに、テレビ・スポット、セノバでの大規模な広報を実施した。 ・篠山紀信氏によるトーク・ショーを2回実施。 ・さらに会期後半には、折込チラシの配布なども行った。 ・これらの取組により、広報効果を上げることができ、篠山紀信氏の「写真力」をできる限り多くの方々に体感いただくことができた。 ・来館者ターゲットとしていた、10代～20代の男女、50～60歳代の男女という幅広い年齢層の獲得については、一定の成果を上げたと考える。 	
自己評価 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館では、初めてとなる篠山紀信氏の個展。「写真力」という新たなテーマのもとに、篠山紀信氏の写真世界の魅力を伝えることができたと考える。 ・教育普及活動として、篠山紀信氏のトークショーを実施し、多くの方に篠山紀信氏の人間的な魅力にふれていただいた。また作家・野沢裕氏によるワークショップを2日間実施し、写真の不可思議性と可能性とを来館者に感じていただくことができた。 ・しかし、来館者数が、目標の45,000人には達することができず、数値目標の設定や展覧会マネジメント、広報戦略など、様々な課題を残した。これらについては、今後、経営の面から、さらに検証をしていく必要がある。 		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	スイスデザイン展
------	----------

期 間	7月11日(土)～8月23日(日) (38 日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	村上敬
------	-----

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2015年4月9日(木)
	実績	2015年10月22日(木)

企画		実績・検証
目的・内容	<p>永世中立国としてアルプスの国として知られるスイス。平和と自然に恵まれたスイスはヨーロッパ有数の豊かさを誇る国でもあり、優れた工業デザインでも知られる。このような点でスイスはわが国との深い共通点を持つ国であり、長きにわたる交流の歴史もある。2014年には、修好通商条約締結(1864年)150周年を迎えている。本展は、その優れた機能性とデザイン性において世界中で親しまれているスイスのメーカー各社の協力を得て、そのデザインを振り返るものである。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 評価対象外のためなし。</p>
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>(ねらい) ・日本とスイスとの出会い、そして岩倉使節団のスイス視察を中心とする両国交流史を簡単に紹介。 ・ノバリー、ピクトリノックス、ネフ、スウォッチなどの美しいデザインプロダクトの紹介。 ・ポスターを中心とするグラフィックデザイン、スイスの生んだ世界的建築家ル・コルビュジエの作品を紹介。</p> <p>(ターゲット) ・20～40代前後のデザインに関心の高い層(男女半々か)。 ・40～60代前後の旅行や自然に関心の高い層(男女半々か)。 ・夏休みのファミリー層。</p>	<p>【アンケートにみる特徴】 ・平素高い割合を示すシニア層の来館は少なかった(回答者に占める割合/70歳以上2.7%)。 ・いっぽう、ミドル層の割合は高い(回答者に占める割合/40歳代:22.1%、50歳代16.3%、60歳代:7.3%)。「40～60代前後の旅行や自然に関心の高い層」の誘客に成果をあげたといえる。 ・若年層の来館が多い(回答者に占める割合/12歳以下:4%、13-19歳:15.3%、20歳代:15.8%)。夏休みのファミリー層と学生層であろう。 ・全体的な満足度も高い(「はい+どちらかといえばはい」の割合/全体:92.9%、うち新規来館者95.6%)。とくに新規来館者の方がやや満足度が高いということは、本展を目指して新たに来館を試みた層に満足してもらえたことと考えられる。</p>
指標(数値目標)	観覧者数 11,000人	観覧者数 15,337人
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 15,875千円 ・歳入 7,695千円 ・特財率 48.5% 	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 13,908千円 ・歳入 8,478千円 ・特財率 61.0%
広報戦略 主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビ静岡と協力し、同社のTV放送電波を利用した露出(スポットCM等)。 ・市内のスイスデザイングッズ販売店とのコラボレーション(ネフの教育玩具など)。 ・グッズ売り場の充実により、デザイングッズに関心を寄せる層の誘客。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビ静岡の露出/15秒CM200本超、番組内広報4番組、同社ホームページ掲載。積極的な協力を得られたと評価できる。 ・静岡大学、静岡県立大学、静岡文化芸術大学、常葉大学等デザインや国際文化に興味関心のある学生を対象として、講義の終了後等に時間を割いていただき展覧会の説明をした。 ・出展ブランドを取り扱う店舗において半券を提示するとポストカードを配付する等、出展ブランドの協力を得てキャンペーンを実施した。 ・「実技講座 ネフのデザインと遊び」(7/20)に講師を派遣くださった絵本とおもちゃの専門店「百町森」にてチラシ配布協力
自己評価 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・当館初の試みとなる現代デザイン展であり、未知数の部分が多かった。 ・しかしながら、15,337名の集客を実現でき、まずまずの反響があったと感じている。 ・当館で初の現代デザイン展ということで、現状では「話を聞いたときには市美での展覧会と思った」(百町森スタッフ)という反応もあり、「ライトで現代的な展示＝市美」「重厚で歴史的な展示＝県美」というイメージの存在を感じた。ブランドイメージの確立したいは良いことなので、「手堅い県美もこういうものをするのか」という新鮮な驚きのある企画を今後も狙いたい。 ・静岡大学教育学部デザイン科、静岡デザイン専門学校(引率で数度来館)、百町森といった県内のデザイン関係者からはたいへん好意的な反応を得た。 ・展示台の制作等、コスト面でも厳しい部分があったが、節約して支出を最小限に抑えることができた。 	

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	富士山—信仰と芸術—
------	------------

期 間	9月5日(土)～10月12日(月・祝) (33日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	石上充代
------	------

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無

記入日	企画	2015年4月28日(火)
	実績	2015年12月7日(月)

企画		実績・検証	
目的・内容	<p>古来、富士山は信仰の対象として崇敬されるとともに、様々な芸術活動を生み出す源泉となってきた。信仰と芸術に関する富士山の普遍的な文化的価値が認められ、世界文化遺産として登録されたのは記憶に新しいところである。本展は、世界遺産登録を記念し、あらためてその文化的意義を示すため、富士山を介して縁の深い山梨・静岡の両県が手を携えて開催するものである。富士信仰を核として、その歴史の変遷や、信仰を起点として生み出された芸術作品を紹介する。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・富士山を描いた絵画を軸に、彫刻、工芸を加え、信仰の側面からも富士山を考え、見てみようという好企画である。山梨県立博物館との協力をえて、巡回展としているところも評価できる。県立美術館として学芸の軸なテーマとなっている富士山の絵画を、今後とも研究し、展覧会を組織していくべきである。(金原委員) ・文化遺産としての富士山の意味と姿を問う内容は画期的。そもそも静岡県立美術館と山梨県立博物館との共同企画として構想したことこそがこの展覧会を充実した内容にさせた。その意味でこの二つの館をコラボさせた企画者の着想を称えたい。(榊原委員) 	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>山梨・静岡の両県立館が蓄積してきた富士山に関する調査研究の成果を生かして開催するものであり、信仰と芸術という富士山の文化的価値に対して、各館の特色を生かしてアプローチする。富士山に関する展覧会は過去にも開催実績があるが、今回はとりわけ富士信仰を軸に据えることによって、これまでの富士山展にない特色を打ち出すとともに、作品の重層的な意味を明らかにし、新たな見方を提示したい。</p> <p>主なターゲットは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県内を中心とした中高年層 ・芸術のほか歴史に関心の高い人々 と考える。 	<p>【アンケートにみる特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来館者の属性として、男性(49.3%、H26平均39.2%)、50歳以上の中高年層(65.1%、H26平均32.7%)、リピーター(来館経験10回以上43.3%、H26平均28.1%)の割合が高い。概ね当初予想の通りといえる。 ・来館のきっかけとして新聞を挙げる人の割合が高い(33.7%)。シニア層の割合が高いことと関連していよう。この点で静岡新聞との共催は有効であった。 ・「心地よく鑑賞」91.5%、「スタッフの対応適切さ」85.1%、「総合満足度」90.7%といずれも高い数値を示す。 	
指標(数値目標)	観覧者数 15,000人	観覧者数 13,404人(89.4%) 作品やテーマに興味を持った人の割合 83.4%	
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 21,231千円 ・歳入 9,200千円 ・特財率 43.3% 	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 20,281千円 ・歳入 8,787千円 ・特財率 43.3% 	
広報戦略 主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・名義共催の静岡新聞と協力し、新聞・テレビを通じた効果的な広報を展開する。 ・当館で展示機会の少ない歴史・考古に関する文化財や、仏像・神像などが多数紹介されることを積極的にアピールし、絵画に関心を持つ人々だけでなくより幅広い層の興味喚起を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・名義共催静岡新聞・SBSと協力した広報活動を行った。ただ、会期前半は当館県民ギャラリーにおいて静岡新聞・SBSが主催する空海展を開催しており(9月3日～26日、有料)、2つの展覧会を混同する向きもあり若干の混乱を招いた。 ・商工会議所の広報協力を得て、チケットの一括販売をしたが、福利厚生事業と重複することに対する苦情も出た。 ・期間中の静岡市高齢者教室(2回)、大学コンソーシアム授業(1回)にて展覧会内容を講義し、集客を図った。 	
自己評価 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・富士山の絵画に関する当館の調査研究や収集・展覧会活動の成果を活かしつつ、他ジャンルを主な研究領域とする山梨県立博物館との連携により、富士山の文化的意義について多面的に掘り下げることができた。富士山を擁する当地の美術館ならではの内容であり、独自性を十分に示すことができたと思う。そのことは研究活動評価委員による評価によっても裏付けられた。また、新規来館者の来館のきっかけのうち「一度、静岡県立美術館に来たいと思っていた」が、他展に比べて突出した数値を示しており(25.4%)、当館への潜在的な期待に応える展覧会であったと考えられる。 ・本展を機に、新たに基礎調査が進み写真資料を残すことができた作品が多数あった。富士山にまつわる文化財の調査研究の進展におおいに貢献したものと見える。 ・会期前半、2階展示室(富士山展)と1階県民ギャラリー(空海展)において、有料催事が同時開催された。結果として、一般来館者が二つの展覧会に観覧料を支払うことは相当にハードルが高いことが分かった。今後同様の試みをするのであれば、破格のセット割引を用意するなど慎重な対応が必要と思われる。 ※参考 富士山展観覧料 一般1000円、70歳以上500円、大学生以下無料/空海展観覧料 一般800円、大学・高校生500円、中学生以下無料 (互いに半券提示による割引有) ・静岡・山梨いずれも観覧者数は伸び悩んだ(山梨会場:6千人弱)。内容としてはかつてないものであったが、それを元に広く興味を喚起するだけの発信ができなかった。2年前の世界遺産登録に伴って富士山を顕彰する活動は様々に行われており、地元の人々にとって「富士山」の新鮮味は薄れてしまった印象もある。 		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	写真家の眼/版画家の眼 6つのアンソロジー展
------	------------------------

期 間	11月8日(日)~12月9日(水) (28日間)
場 所	静岡県立美術館第1~5展示室

担当者名	南 美幸
------	------

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2014年4月29日(水)
	実績	2016年1月25日(月)

企画		実績・検証	
目的・内容	当館所蔵品およびご寄託品の中から、「場」と「美術」を巡る6つのキーワードを軸に、写真と版画連作を中心として、広くコレクションを紹介する機会とする。	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 (潮江委員) ・とても斬新な試みであり、独自性に関しては言うまでもない。連作形式のコレクションを活用するために考案された創意工夫が感じられる展覧会である。 ・コレクションの活用を前提とした展覧会であるためか、開催の必然性に関するメッセージのアピール度がどうしても弱くなっている感がある(以前は版画が、現代では写真が、最重要のヴィジュアルコミュニケーション手段であることなど、学芸員には当然のこともことさら表面化した方がよいのではないか)。 ・今後とも収集成果を活かす、このような斬新な試みを続けてほしい。 (山梨委員、1月27日現在未提出)	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	本展は、一つの明確なテーマを設定した企画展というよりも、コレクションとご寄託品との出会いから生まれた、それぞれが緩やかに関わり合う、6本の短編小説のような構成となっている。コレクションを新たな視点から捉え直す試みでもあり、また企画展のあり方に対して、一ひねりした方向性を提起するものでもある。 出品作品の多くが版画と写真であり、当館で初公開となる写真作品も含まれる。昨年の「下岡蓮杖展」、今年度の「篠山紀進展」に続き、写真ファンの新規・継続両方の来場とともに、従来の美術ファンにも応える内容と思われる。	【アンケートにみる特徴】 [来館者の属性、等] ・新規来館者は全体の2割弱で、8割がリピーター。男性・女性の割合はほぼ半分で、新規来館者についても同様。 ・来館のきっかけはポスターとHPが1.5割。新規で回答の多かったのは、「一度来館したかった」(30%)、「たまたま時間があつた」(26%)。 ・居住地域については静岡市内が圧倒的比率を占め(43%)、県内のそれ以外の地域への広報を工夫する必要あり。しかし、県外からが11%と意外に多い(HP?)。 ・「作品・テーマへの関心の深まった」という回答が約75%、「心地よく鑑賞できた」という回答が約88%、「全体的満足度」への肯定的回答は84%。 [個別意見] ・照明が暗くて鑑賞しにくい、小さい版画などの拡大イメージを見たい、との意見が複数あつた。作品保護の観点から照度を上げることは難しいため、部分図の拡大複製を今後工夫したい。	
指標(数値目標)	観覧者数 11,000人	観覧者数 4,126人	
収支計画	・歳出 2605千円 ・歳入 1801千円 ・特財率 42.2%	・歳出 3,918千円 ・歳入 989千円 ・特財率 25.2%	
広報戦略 主な取組	コンサート、レクチャーや実技系講座等のイベント実施を計画中である。 会期が非常に短いことから、有効な広報戦略について今後検討したい。		
自己評価 今後の課題	・潮江委員の評価のとおり。収蔵品および寄託品の活用という点からは、これまでにないテーマ・内容の企画展を試みる事ができたが、そのアピールの仕方に関しては今後工夫の要あり(学芸サイド)。 ・今後、収蔵品および収蔵品展をどのようにアピールしていくか(あるいはしていかないか)については、全館で検討する課題である。収蔵品展であることを全面に押し出すと集客率が低くなるという見方がある一方で、本展のアンケートにも「常設展を充実させてほしい」という意見が複数見られたことから、収蔵品展を楽しみにして下さる鑑賞者が確実に存在することは、コレクションを持つ当館の強みであると思われる。 ・観覧者見込数に達しなかった企画展の場合には、常に広報戦略が大きい課題となっている。これは、学芸・総務の各担当者だけでは解決できないため、広報委員会などのサポートを今後も望む。		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	ウィーン美術史美術館展
------	-------------

期 間	12月18日(金)～3月21日(月・祝) (77日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	三谷理華
------	------

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有・ <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有・ <input type="radio"/> 無
マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> 有・ <input type="radio"/> 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有・ <input type="radio"/> 無

記入日	企画	2015年4月9日(木)
	実績	2016年4月19日(火)

企画		実績・検証	
目的・内容	ヨーロッパ主要美術館の一つ、オーストリア国立のウィーン美術史美術館には、神聖ローマ帝国皇帝を務めたハプスブルク家のコレクションにはじまる膨大な数の美術作品が所蔵されている。この世界屈指のコレクションから、「風景画」に焦点をあてて作品を精選して紹介し、ヨーロッパにおける風景画の誕生と展開の歴史を紐解くことを試みる。 同時に本展は、世界的美術館の収集品を静岡で初めて展覧するものであり、地域の文化育成への貢献が期待されるとともに、当館の収集の大方針に「風景画」があることに鑑みれば、美術館の活動と連動する点にも意義が認められる。	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 (坂本委員) ・館の重点収集分野との重複した巡回展であったために、出品作品は館にとってよい貴重な研究(勉強)対象になったと思われる。 ・年間数多く開催される将来品による展覧会の中で、稀少な魅力の大きな展覧会といえるのではないかと思つた。 (潮江委員) ・風景画の収集・展観を主要目標に掲げている静岡県立美術館に最適の展覧会であると言える。 ・ウィーン美術史美術館のコレクションから、第7室収蔵品展での静岡県立美術館の風景画コレクションへと巧妙な流れが築かれ、近代風景画への流れが別の視点からよくわかる展示になっていた。	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	【ねらい】 ハプスブルク家が統治した神聖ローマ帝国は、現在のオランダ、ベルギーを含むネーデルラント諸国を治めていたため、同家コレクションには、ヨーロッパ美術の歴史において最初に自立的「風景画」を生み出した17世紀オランダの風景画の優品が数多く含まれる。この分野の作品を中心に作品選定し、世界に名高いウィーン美術史美術館のコレクションのハイライトを紹介するとともに、ヨーロッパにおける「風景画」成立の問題を再考する機会とする。 【ターゲット】 静岡県内および東海圏に居住する30代～40代の女性、ならびに同じ地域の50代～60代の男性・女性。冬休み期間中などは、静岡市近郊を中心としたファミリー層。	【アンケートにみる特徴】	
指標(数値目標)	観覧者数見込 35,000人	観覧者数 20,450人	
収支計画	・歳出 △5千円 ・歳入 14,045千円 ・特財率 100.0%	・歳出 14,040千円 ・歳入 7,359千円 ・特財率 52.4%	
広報戦略 主な取組	・共催メディアである静岡朝日テレビを通じてのCMスポット放映。 ・できるだけ早期から徐々に広報活動に取り組み、展覧会の情報を地域に浸透させる。 ・講演会やミニコンサート開催等を通じて美術に限定されないウィーンの文化的諸相を伝え、県民の幅広い関心を掘り起こし誘客につなげる。	・静岡市内の映画館である静岡シネギャラリーで上映の映画『黄金のアデーレ 名画の帰還』との連携によるイベントを開催し、事前の告知に努めた。 ・10月より広報活動を開始し、早めの告知努力を行った。 ・音声ガイドの吹込みをさせていただいた俳優の榎木孝明氏に「展覧会応援大使」としてTVスポットにご出演いただき、告知のすそ野を広げることを試みた。 ・名義共催に入っていた中日新聞に紙面をいただき、学芸員による連載記事執筆などを積極的にに行った。 ・クリスマス、正月、バレンタインなどの時宜を捉えてプレゼントイベントなどを行い、誘客を図った。 ・割引クーポン付新聞折り込み広告の配布を静岡市内で2回実施し、幅広い層への告知に努めた。	
自己評価 今後の課題	(自己評価) ・美術館の収集活動方針に即した内容の展覧会を行い、収蔵品展を活用して収蔵品とも対比するかたちで展覧することで、双方の展覧会をより意義深いものとし、また、収蔵品の意義を改めて評価する好機とできた。 ・共催マスコミや地元施設との協力によるイベントや広報活動を様々なかたちで試み、継続的な連携の強化が計れた。 (今後の課題) ・実行委員会形式で展覧会を行う場合、会期が長ければ監視員人件費など支出も増えることになるため、より精査を重ねたバランスの良い会期設定の必要が痛感された。		

【資料 2】

調査・研究に関する自己評価点検評価報告書（平成 27 年度）

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 5 月 9 日	
職・氏名	学芸部長 泉 万里
●専門分野	日本中近世絵画史
●所属学会	美術史学会 家具道具室内史学会 藝能史研究会
●主要研究テーマ	中世風俗図、中世社寺縁起絵
<p>1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学术论文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文「昆明池図小考」(『家具道具室内史』7 平成 27 年 6 月) ・分担執筆「各論④屏風・扇」(村井章介ほか編『日明関係史研究入門 アジアのなかの遣明船』勉誠出版 平成 27 年 10 月) ・論文「社寺縁起絵と素朴絵」(泉武夫編『日本美術全集』11 信仰と美術 小学館 平成 27 年 10 月) ・論文「新出の大織冠図屏風 描き直されたクライマックス」(『藝能史研究』212 号 平成 28 年 1 月) <p style="text-align: right;">小計 4 本</p>	
<p>2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業 「富士山 信仰と芸術」図録作品解説 17 点、連続美術講座 (3 回)、講演会 (1 回 於：山梨県立博物館)</p> <p style="text-align: right;">小計 1 本</p>	
<p>3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図版解説「高野山水屏風」(加須屋誠編『日本美術全集』8 中世絵巻と肖像画 小学館 平成 27 年 6 月) ・図版解説「親鸞聖人絵伝 (万福寺旧蔵)」ほか 7 点 (泉武夫編『日本美術全集』11 信仰と美術 小学館 平成 27 年 10 月) ・分担執筆「解題」(赤澤英二編 鈴木廣之ほか監修『朝鮮王朝実録抄 中世美術史料』中央公論美術出版 平成 28 年 1 月) ・講演 京都市考古資料館開館 100 周年特別講演都へのあこがれ ひろがる京文化 「中世絵画にみる都への憧れ 12 世紀の平泉の洛陽霊地名所図壁画から 16 世紀の洛外名所図屏風まで」(於：京都アスニー 平成 27 年 10 月 4 日) <p style="text-align: right;">小計 4 本</p>	
<p>4. 収蔵作品に関する論文・発表等</p> <p>1 1 - 1 に同じ</p> <p style="text-align: right;">小計 0 本</p>	
合計 9 本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 5 月 2 日	
職・氏名	学芸課長・三谷理華
●専門分野	美術史
●所属学会	美術史学会、美学会、日仏美術学会、ジャポニスム学会、九州藝術学会、Société de l'histoire de l'art français、ICOM
●主要研究テーマ	ヨーロッパ近代美術史、日仏文化交流史
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	
1	「西欧風景画の中の日本美術—カミーユ・ピサロ作《ライ麦畑、グラット=コックの丘、ポントワーズ》を事例として—」『ウィーン美術史美術館所蔵 風景画の誕生』[図録]、Bunkamura、2015年9月9日、pp.165-171
2	「ラファエル・コランと美術行政—セーヴル国立製陶所関連資料を手掛かりに」『静岡県立美術館ニュース アマリリス』第119号、2015年10月1日、pp.6-7
3	「白井鐵造、パリ、そして宝塚少女歌劇レビュー『パリゼット』」『美術フォーラム 21』第32号、一般財団法人美術フォーラム 21 刊行会、2015年11月30日、pp.59-64
4	「ロダンとラファエル・コラン—ロダン美術館所蔵の関連一次資料にみる交友の諸相」『静岡県立美術館開館 20 周年記念国際シンポジウム オーギュスト・ロダン(1840-1917)—複合的視点でとらえる— 記録論集』、静岡県立美術館、2016年3月18日、pp.56-72
小計 4本	
2. 今年1年間に携わった展覧会及び普及事業	
1	企画展「ウィーン美術史美術館展 風景画の誕生」 主担当
2	同展 フロアレクチャー 4回 (内、友の会会員向け1回)
3	同展 特別講演会①「西洋の曆に描かれた月々の行事と風景」(講師：木島俊介氏) 1回
4	同展 特別講演会②「風景を見る眼」(講師：中野京子氏) 1回
5	同展 美術講座「近代までの西欧風景画ウィーン美術史美術館feat. ケンピ・コレクション」1回
6	同展 記念コンサート「謹賀新年！ニューイヤーミニコンサート」(ピアノ三重奏：近藤由理氏、生田奉子氏、若宮奈々氏) 1回
7	同展関連イベント「ウィーン美術史美術館展—風景画の誕生」×「黄金のアデーレ 名画の帰還」コラボ企画 ウィーンと美術をもっと知る！アフター・トーク「音楽だけじゃないっ！美術の都ウィーン」(講師：池田祐子氏) 1回
8	同展 自治研修所夜間講座「ウィーン美術史美術館展—風景画の誕生 裏も表もお見せします！」1回
9	同展 子どもたちの文化芸術鑑賞推進事業 出張美術講座 2回
10	同展 展覧会紹介新聞寄稿「風景画の誕生物語」(中日新聞) 1回
11	同展 作品紹介新聞連載寄稿「ウィーン美術史美術館展 風景画の誕生 ①～⑤」(中日新聞) 5回
12	同展 作品紹介雑誌寄稿「花まわり 植物が登場するアートたち 楽園に漂うリンゴの誘惑の香り」(『小原流 插花』第782号) 1回
13	同展 展覧会紹介雑誌寄稿「構図で読み解く風景画の変遷」(『美術の窓』第388号) 1回
14	企画展「スイスデザイン」展 副担当
15	収蔵品展「西洋近代の風景画」展 主担当
16	同展 フロアレクチャー 2回
17	収蔵品展「新収蔵品展」 フロアレクチャー 1回
18	『静岡県立美術館開館 20 周年記念国際シンポジウム オーギュスト・ロダン(1840-1917) —複合的視点でとらえる— 記録論集』編集
小計 27本	
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	
1	ジャポニスム学会学芸員勉強会代表幹事
小計 1本	
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	
1	1-1に同じ
小計 (1)本	

合計 32本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 6 月 2 日

職・氏名 主任学芸員 浦澤倫太郎

- 専門分野 日本美術
- 所属学会 美術史学会
- 主要研究テーマ 近世絵画

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)
「海を越える富士山」(『富士山—信仰と芸術』)

小計 1 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

企画展『富士山—信仰と芸術』(副担当)
収蔵品展『妙法華寺の名宝』

小計 2 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

小計 0 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

小計 0 本

合計 3 本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 5 月 4 日

職・氏名 上席学芸員 新田建史

- 専門分野 美学美術史
- 所属学会 地中海学会、保存修復学会
- 主要研究テーマ 西洋 16～18 世紀美術、東西美術交流史、東西版画史、文化財保存

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

小計 0 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

- ・「西洋の絵画一画材とともに 2」展担当
- ・「学芸員によるフロアレクチャー」10 月 10 日 (土)
- ・「写真家の眼/版画家の眼 6 つのアンソロジー」展副担当

小計 3 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

- ・「愛知県立芸術大学集中講義」9 月 24 日 (木)、25 日 (金)
- ・シンポジウム「伊豆市美術館建設に向けた市民フォーラム」パネラー 2 月 25 日 (木)
- ・「静岡県立美術館 ケース等の温湿度環境について」(日本建築学会熱環境運営委員会湿気小委員会、文化財の保存と活用のための環境制御 WG) 3 月 25 日 (金)
- ・「伊豆市美術館建設準備委員」

小計 4 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

小計 0 本

合計 10 本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 5 月 2 日	
職・氏名	上席学芸員・石上充代
●専門分野	近世近代の日本画
●所属学会	美術史学会、近世絵画研究会
●主要研究テーマ	日本近世近代絵画史
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	
1 「描かれた富士山の諸相—信仰を意識しつつ」『富士山—信仰と芸術—』展図録 平成 27 年 9 月 2 「鈴木松年《神武天皇・素戔嗚尊図屏風》—主題と造形の特質について—」『静岡県立美術館紀要』第 31 号 平成 28 年 3 月	
小計 2 本	
2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業	
1 企画展『富士山—信仰と芸術—』主担当 2 同展 特別講演会 2 回 3 同展 フロアレクチャー 2 回 4 平成 28 年度企画展『美術館に行こう！』展準備 5 出張美術講座 1 回	
小計 5 本	
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	
1 三保松原学文化講座「富士山と三保松原の絵画史」平成 28 年 2 月 13 日 於・清水テルサ	
小計 1 本	
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	
小計 本	
合計 8 本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 4 月 25 日	
職・氏名	上席学芸員 川谷承子
●専門分野	現代美術
●所属学会	
●主要研究テーマ	戦後の日本美術
<p>1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学术论文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等) ・論文「長船恒利の『在るもの』と、1970年代の静岡、東京のアマチュア写真家の関わりについて」(『静岡県立美術館紀要』第31号、平成28年3月)</p> <p>・エッセイ「岡本光市 ジャンルを横断する個性」(『めぐりアート静岡 ちょっと、ざわざわ、しに行く。記録集』、平成27年3月)</p> <p style="text-align: right;">小計 2本</p>	
<p>2. 今年1年間に携わった展覧会及び普及事業</p> <p>新収蔵品展 収蔵品展「白の表現力」 夏休み子どもワークショップ めぐるりアート静岡 「東西の絶景」展準備 現代ジャンル</p> <p style="text-align: right;">小計 5本</p>	
<p>3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動</p> <p>寄贈作品の受け入れ (3点) 石田徹也作品のベニスビエンナーレへの貸出 (3点) 草間彌生作品の北欧美術館への貸出 (1点)</p> <p style="text-align: right;">小計 3本</p>	
<p>4. 収蔵作品に関する論文・発表等</p> <p>・論文「石田徹也の今日性」(静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.118、平成27年4月)</p> <p style="text-align: right;">小計 1本</p>	
合計 11本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 5 月 2 日	
職・氏名	上席学芸員・村上敬
●専門分野	日本近代美術
●所属学会	美学会、美術史学会、文化資源学会、明治美術学会等
●主要研究テーマ	日本近代洋画史
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	
<ul style="list-style-type: none"> ・「少女表象をセクシュアリティから論じることの困難さについて——「美少女の美術史」余滴」(『静岡県立美術館ニュース アマリリス』120, 2015年7月) ・「シャルロット・ペリアンと商工省工芸指導所——戦中産業工芸をめぐるひとつのすれ違い」(『静岡県立美術館紀要』31, 2016年3月) 	
	小計 2 本
2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業	
<ul style="list-style-type: none"> ・企画展「スイス・デザイン」展主担当 ・企画展「ウィーン美術史美術館」展副担当 	
	小計 2 本
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	
	小計 0 本
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	
	小計 0 本
合計 5 本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 4 月 1 日

職・氏名 上席学芸員 泰井良

- 専門分野 日本近代洋画、ロダン、美術館評価、ミュージアムマネジメント
- 所属学会 美術史学会、明治美術学会、日本ミュージアムマネジメント学会
- 主要研究テーマ 明治美術会から太平洋画会、明治から昭和期の美術

1. 今年一年間に執筆した主な論文

(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

- ・学会発表「美術館を対象とした鑑賞行動分析システムの構築」渡邊貴之、村松真帆、松永菜摘（静岡県立大学）、泰井良（静岡県立美術館）（観光情報学会 11/27）
- ・学会発表「美術館におけるスマートフォン館内ガイドシステムを用いた鑑賞行動分析」松永菜摘、村松真帆（静岡県大）、泰井良（静岡県立美術館）、渡邊貴之（静岡県大）（情報処理学会 3/11）
- ・学会討論「文化施設と法制度」（日本文化政策学会 3/5）

小計 3 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

- ・篠山紀信展 写真力(主担当)
- ・移動美術展「秋野不矩 創作の旅路 特別編 画家たちの世界旅行」展(主担当)
- ・移動美術展「焼津市出身の夭折画家 石田徹也の世界展」(主担当)
- ・篠山紀信展フロアレクチャー(4/19、5/10、6/7) 3回
- ・収蔵品展「大正時代の洋画家たち」展フロアレクチャー(11/15)
- ・収蔵品展「日本人の風景画」展フロアレクチャー(3/20)
- ・移動美術展フロアレクチャー(9/20)
- ・移動美術展フロアレクチャー(12/5)
- ・静岡大学比較言語文化各論 I 講師(ロダン館 大学生ギャラリートーク)

小計 11 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

- ・「静岡県立美術館の評価と地域連携の取組について」
【(一財)地域創造主催 高知県立美術館 (2/25)】
- ・一般財団法人地域創造公立美術館活性化事業企画検討委員
- ・全国美術館会議地域美術研究部会幹事
- ・三重県総合博物館(みえむ)評価部会副部会長
- ・鴨江アートセンター外部評価委員
- ・浜松市美術館美術資料審査会委員

小計 7 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

- ・学会発表「美術館を対象とした鑑賞行動分析システムの構築」渡邊貴之、村松真帆、松永菜摘（静岡県立大学）、泰井良（静岡県立美術館）（観光情報学会 11/27）
- ・学会発表「美術館におけるスマートフォン館内ガイドシステムを用いた鑑賞行動分析」松永菜摘、村松真帆（静岡県大）、泰井良（静岡県立美術館）、渡邊貴之（静岡県大）（情報処理学会 3/11）

(小計 2 本)

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 5 月 11 日	
職・氏名	上席学芸員 ・ 南 美幸
●専門分野	美学・美術史
●所属学会	美術史学会、日仏美術学会
●主要研究テーマ	西洋美術史、ロダン関連
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学术论文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	
1 論文「写真家の眼／版画家の眼 6つのアンソロジー展に寄せて」(写真家の眼／版画家の眼 6つのアンソロジー) 展出品目録、平成 27 年 11 月)	
小計 1 本	
2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業	
1 企画展「写真家の眼／版画家の眼 6つのアンソロジー」	企画・実施
2 企画展「写真家の眼／版画家の眼 6つのアンソロジー」	フロアレクチャー 2 回
3 企画展「写真家の眼／版画家の眼 6つのアンソロジー」	音楽イベント 企画・実施
4 ロダン館タッチ・ツアー 4 件	
5 タッチ・ツアー 実施 2 件	
小計 5 本	
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	
1 美術雑誌『サイト・アート』3号 インタビュー記事掲載	
小計 1 本	
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	
小計 本	
合計 7 本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 28 年 5 月 5 日

職・氏名 主任学芸員・野田麻美

- 専門分野 日本近世絵画
- 所属学会 美術史学会
- 主要研究テーマ 狩野派を中心とする桃山末～江戸時代の絵画

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

「谷文晁『富士山図屏風』について一文晁晩年の实景表現とのかかわりを中心に」 (『聚美』18号
平成28年1月)

小計 1 本

2. 今年1年間に携わった展覧会及び普及事業

移動美術展 (於浜松市秋野不矩美術館 平成27年9月12日(土)～10月4日(日))

移動美術展 (於焼津文化会館 平成27年12月5日(土)～12月12日(土))

小計 2 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

小計 0 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

小計 0 本

合計 3 本

定性評価の状況（平成 27 年度）

【富士山-信仰と芸術-展】〈自主企画展〉

(金原委員)

- ・ 富士山を描いた絵画を軸に、彫刻・工芸を加え、信仰の側面からも富士山を考え、見てみようという好企画である。山梨県立博物館の協力を得て、巡回展としているところも評価できる。

(榊原委員)

- ・ そもそも静岡県立美術館と山梨県立博物館との共同企画として構想したことこそがこの展覧会を充実した内容にさせた。その意味でこの二つの館をコラボさせた企画者の着想を称えたい。図録も二館の学芸員の共同作業の成果として見るべきだろう。

【写真家の眼/版画家の眼 6つのアンソロジー 展】〈自主企画展〉

(潮江委員)

- ・ 連作形式のコレクションを活用するために考案された創意工夫が感じられる展覧会になっている。今後とも、コレクションを活用した、このような斬新な試みを続けて欲しい。

(山梨委員)

- ・ 本展は収蔵品と寄託品で構成するという前提の中で、企画者が「場所」と「物語」および美術史上の運動をめぐる6つのキーワードを紡ぎ出し、それらに対応する作品を作品相互に鑑賞の視点が輻輳化されるように選んだ企画となっていた。企画者本人の調査研究やこれまで担当した展覧会の経験だけでなく、美術館総体として蓄積してきた調査や展覧会を含む知的財産が活かされていた点も評価したい。

【ウィーン美術史美術館展-風景画の誕生-】〈自主企画展〉

(坂本委員)

- ・ 風景画を基準にして風景表現史を考えると、この風景画展は少し違う。これは17世紀の風景に私の場合馴染みすぎていたからで、15・16世紀の風景表現とはこういうものだったことを思い出すよい機会だと思った。

(潮江委員)

- ・ ハプスブルク家ゆかりのウィーン美術史美術館という全欧的、つまり南方も北方もともに充実した収集作品を誇る美術館のコレクションをもとにして、西欧における風景画の誕生を生き生きとした形で語っており、充実した展観となっている。

(西洋)

ボン（ドイツ連邦共和国）のブンデス・クンスト・ハレで開催された「日本の印象派愛好（Japan's Love for Impressionism）」展に、ポール・ゴーギャン作《家畜番の少女》（1889年）を貸し出した。同展は、日本国内の国公立美術館や個人コレクターを中心とした約30件の借用先より約130点の作品を借り受けて展示し、近代から現代までの日本人によるフランス近代美術収集の様相や、それが近代日本の洋画にもたらした影響などを検証した展覧会。この分野の所蔵品に優れた美術館の名品が一堂に会した同展への貸出により、当館西洋分野のコレクションの質の高さを示すことができた。また会場では、当館作品はひろしま美術館のゴーギャン作品と隣り合って展示されたが、これにより当館作品におけるゴーギャンの総合主義時代の特質がより際立つかたちで紹介されていた。

(日本画)

「富士山—信仰と芸術—」（静岡県立美術館・山梨県立博物館）に23件（所蔵品12件、寄託品11件）を出品。絵画ジャンルの主要な部分を占め、富士山の絵画に関する当館所蔵品の充実を改めて示す機会となった。「久隅守景」（サントリー美術館4件）、「若冲と蕪村」（サントリー美術館・MIHO MUSEUM2件）、「橋本雅邦と幻の四天王」（松本市美術館2件）などに各作家の重要作として所蔵品・寄託品を出品した。「画家たちと戦争」（名古屋市美術館1件）、「唐絵もん」（千葉市美術館・大阪歴史博物館1件）といったテーマ展にも出品、各展独自の内容を充実させるのに貢献した。

(現代)

現代ジャンルでは、海外への貸出、公開が2件あった。

まず、イタリアで開催された、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際企画展に、石田徹也の《めばえ》《兵士》、《くらの夢》の3点を出品した。オクウィ・エンヴェゾーがキュレーションを務めた、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展「All the World's Futures（全世界の未来）」には、53カ国136組の、アーティストが選出され、日本からは、石田徹也1人が選ばれた。展覧会には、世界中から約50万人の来場者があり、石田徹也の名を世界に向けて広め、国際的評価を高める契機の一つとなった。

もう1件は、平成27年夏に始まった草間彌生の北欧巡回展「Yayoi Kusama」への出品である。開催館からの熱心な借用依頼を受け、草間彌生の《無題》を、デンマークのレイジアナ美術館と、ノルウェーのヘニー・オンスタッド・アートセンターの2会場に貸し出した。同ツアーは、北欧では初めての、草間の本格的な回顧展であったが、1会場目のレイジアナ美術館では、約5カ月の会期中に、1958年に同美術館が開館して以来3番目に多い、約34万人の来場者があり、専門家やメディアからも高い評価を受けたとの報告を受けている。比較的新しい作品に加えて、初期の重要な1点となる、当館所蔵作品を出品したことにより、展覧会の幅に深みを出すことに寄与し、草間彌生の世界規模の再評価に、貢献することができた。

(日本洋画)

平成27年度の日本洋画の公開・貸出については、学芸員の研究成果を活かした回顧展への貸出が顕著となった。

「没後 100 年 五姓田義松」展(神奈川県立博物館)には、《富士》、《浜離宮》が出品された。本展は、これまで知られていなかった文献資料や初公開作品を含めた約 800 点の作品や関連資料によって、五姓田義松の画業を検証するものである。とりわけ《浜離宮》については、これまで主題となった場所が浜離宮と伝えられていたが、本展の研究成果によって、描かれた場所が京都御所内の御常御殿であることが分かった。

新潟市美術館の開館 30 周年を記念した「川村清雄展 古今東西 混ざりあい」展(新潟市美術館)には、《波》、《風景》、《静物写生》が出品された。本展は、新出作品や新潟ゆかりの作品や関連資料などによって、川村清雄の画業を歴史的に検証するものである。とりわけ《波》の主題について、文献資料の精査によって、主題が「君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて」であることが分かったことは意義深い。

① 研究紀要 村上敬「シャルロット・ペリアンと商工省工芸指導所—戦中産業工芸をめぐる一つのすれ違い」

(坂本委員)

- ・ 1940年という15年戦争末期という時代、戦後分の3世紀もの間、全く忘れてきた戦時下の社会状況が解らなくなってしまうが、「非常時」とか「代用品」とか、久しぶりにそういう言葉に接した。そういう中で、ドイツ、イタリアでもないヨーロッパ人が、それも「女性」がデザイン指導ということで、それだけでも不思議な事実という感心もする。興味深い、素材（竹）の用法とかの他にも、異国女性とのやり取りなど、すれ違いを含めて、もう少し知りたいと思った。

(山梨委員)

- ・ シャルロット・ペリアンが1940年に商工省の招聘によって来日後、同省工芸指導所において行った提案が、ほとんど受容されなかったことを指摘し、その背景について考察した本稿は、ペリアンのしごとと日本の関係についての新たな一面を明らかにしている。戦時色を強めていく時代とその社会を背景に、人々の暮らしに近い位置にある工芸の分野で起こったことが具体的に述べられていて、造形と社会の関係や異文化受容の一例として興味深い。造形に結びついている時代的、社会的背景については、さらに調査を進めることにより、新知見が得られると期待される。

② 研究紀要 川谷承子「長船恒利の『在るもの』と、1970年代の静岡、東京のアマチュア写真家の関わりについて」

(潮江委員)

- ・ 最初の長船恒利研究として、内容の充実した、しかも隅々まで眼の行き届いた論考である。今後の広がりや充実が期待できるものになっている。

(山梨委員)

- ・ 本稿でも指摘があるように、1990年代以降、特にインターネットの普及によって写真やデジタル媒体の画像がふんだんに人の目に触れるようになった。それらを視野に入れずに視覚芸術の展開を跡づけることは、もはや非常に困難となっている。風景画を調査研究や展示の主要な柱としてきた静岡県立美術館が写真へと収集や調査研究の対象を広げていることは心強い。また、美術館の所在する静岡という場所を拠点に展開した視覚芸術、造形活動に注目した調査研究は、中心と周縁という関係を枠組みとしたとらえ方に疑問が呈されて、各地域の視覚芸術活動が再評価されている中であって、国内外の他の地域に対しても示唆的なものとなっている。

③ 研究紀要 石上充代「鈴木松年《神武天皇・素戔鳴尊図屏風》—主題と造形の特徴について—」

(金原委員)

- ・ 京都画壇が新しい方向に進んでいくことを闡明した、そんな時代状況のなかで生まれたのがこの名作とあってよい六曲一双《神武天皇・素戔鳴尊図屏風》であった。そのことを適格にまとめている。

(榊原委員)

- ・ 3でも述べたように、松年のこの作の直後に洋画でも同趣の歴史画が描かれている。描写のリアリティーと云う点でははるかにまさるそれらの作品に対しても、石上論文がこの屏風で指摘した「ジオラマ的情景」との定義が援用できるのから、それらへの目配り、言及があってもよかったと思うし、その当りを今後の課題ともできるのではなか。そこにも問題を絞れば、日本画・洋画の区分を超えた大きな課題にもなるだろう。

いずれにせよ、「ジオラマ的」との評語には納得。

- ・ 「美術館教室」事業の中で、「粘土教室」「絵の具教室」「粘土貸出」など、幼稚園や小学校低学年を対象とした図画工作科の授業対応・授業サポートの内容が人気で、教育普及事業の中でも利用数が一番多いものとなっている。
- ・ 今まで「粘土教室」「絵の具教室」の参加校は、教室が終わると展示室に足を運ぶことがないまま退館をする学校が多かった。参加者が幼稚園児や小学校低学年で「展示室で何かしてしまったら」「さらに作品観覧は時間的にも体力的にも難しい」という参加校職員の声があった。そんな中でも、美術館での鑑賞体験に少しでも触れてもらえるように、「ボランティアとの鑑賞」プログラムを紹介したり、ロダン館を通り抜けて退館する小企画を提案したりしていく中で、「粘土教室」「絵の具教室」と観覧をセットで考える参加校は増加傾向にある。また、観覧を実施した学校からも「やってよかった」という声を多くいただいた。
- ・ 一般向けプログラムでは、企画展・収蔵品展に関わりのある内容という基本方針のもと、静岡在住または静岡ゆかりの現役アーティストを講師に招き、日本画などの伝統的な技法から現代アートまで幅広く、様々な内容のワークショップを行った。企画展とからめた内容のワークショップでは、展示室で担当学芸員から作品解説を聞き、さらにアーティスト側の視点からの作品論も実物を目の前にして聞くことができ、実技を行うことでより鑑賞が深まるといった美術館がワークショップを行う意味のある内容で行うことができた。
- ・ 県立美術館の教育普及事業を利用したことのある方は、一般の参加者も保育園や学校の教員も継続的に参加・利用をしてもらっているが、美術館が教育普及事業を行っていることを知らない・利用を考えていない層もまだまだ多い。静岡大学の「図画工作科教育法」への出張授業を定例化させてもらったり、県内各地区の図工美術科教員研修において教育普及事業を紹介するなどして、継続定期的に広報を行っている。

地域等の連携をさらに深め、地域をパートナーと考える経営を推進した。

地域・大学・企業等

- (1) 「篠山紀信展」では日本平動物園と共通割引チケットを販売し、動物園のビジターセンターにて紀信展のミニパネルを展示。また、日本平ホテルのグループ会社内で、セット券を販売。
- (2) 「有度山フレンドシップ協定」参加施設（県立美術館、SPAC、日本平ホテル、日本平動物園、久能山東照宮）と静岡市立芹沢銈介美術館、静岡市立登呂博物館、静岡鉄道株式会社鉄道部日本平ロープウェイ営業所が連携した地域一体型広報の推進。
 - ・「ふじのくにしずおか観光大商談会 IN 東京」(6/3)、「ふじのくにしずおか観光大商談会 IN 名古屋」(9/15) 及び「ふじのくにしずおか観光大商談会 I N大阪」(2/3) への協働参加、PR、誘客促進。
 - ・各施設を遊覧する観光ルートを提案する「観光マップ」の製作を検討中。
- (3) 草薙商店会等との協働
 - ・特定の組織や団体にとらわれることなく、産・学・官・民が連携して地域の活性化を目指し、地元有志等との定期的な連絡会（朝活）に参加。毎週水曜日午前7時から開催。
 - ・草薙商店会主催の「つながるくさなぎ」冬フェス（12月）では美術館ブースを設け、「ウィーン美術史美術館」展の広報と合わせ、銅版画の実技体験を実施し、約200人が参加。（冬フェス全体では22ブースが出店。約5,000人が来場。）※夏フェスは雨天中止。
 - ・「第2回ロダンウィーク」では、草薙マルシェ実行委員会によるグルメ&雑貨市&パフォーマンス「丘の上のロダンマルシェ」、美術館友の会による、にがお絵製作・販売、地域の若手アーティストの作品展示・販売（アートプラット）を開催。
- (4) 静岡県立大学との共同研究
 - ・静岡県立大学経営情報学部渡邊研究室と当館との共同研究により、スマートフォン用ロダン館ガイドアプリを開発中。平成28年度、県立美術館30周年での本格稼働を目指す。平成27年度中にロダン館内にWiFiのフリースポットを設置し、来館者がアプリをスマートフォンにダウンロードできる環境を整備する。
 今後は、多言語化対応（英語、中国語、韓国語）も進める予定である。
- (5) 静岡大学との連携による事業の開催
 - ・ギャラリートーク
 前期授業単位に認定した「大学生によるロダン館ギャラリートーク」の開催。
 - ・めぐりアート静岡
 静岡にゆかりがある8人の作家の展覧会を静岡大学と共催で、当館と市内7ヶ所のギャラリー等を会場に、マップを見ながら市内をめぐり鑑賞する「めぐりアート静岡」を開催した。
 - ・「第2回ロダンウィーク」で静岡大学生他による「ギャラリートーク」、「ピアノコンサート」、「ダンス公演」を開催した。
- (6) 商工会議所との連携
 - ・「富士山ー信仰と芸術ー」展において県商工会議所連合会、静岡市商工会議所と連携し、各会員に企画展のPR及びチケットの購入斡旋を依頼し、2,000名を超える実績があった。

(7) 企業との連携

- ・ 県民ギャラリーにて静岡新聞社が開催した「空海展」と協働し、「富士山ー信仰と芸術」展と相互のチケット（半券）提示による観覧料割引サービスを行った。
- ・ 「篠山紀信展」では、静岡鉄道と共通割引チケットを販売。また、静鉄バスフロントマスクに企画展広告を実施した。
- ・ 新静岡セノバの協力により、セノバを会場に「篠山紀信展」大型タペストリーとミニパネルの展示、当館観覧半券提示で飲食割引キャンペーンを実施した。

ムセイオン静岡

谷田地域の文化教育 6 機関（県立大学、美術館、中央図書館、埋蔵文化財センター、SPAC、グランシップ）が連携して情報を発信するイベントを実施。

(1) ムセイオン静岡・グランシップ 連続講座「静岡×徳川時代」（全 8 回）の開催。

- ・ 1 月 16 日「徳川日本の美術と博物趣味」（講師：館長 芳賀徹）

(2) ムセイオン静岡協働イベント「文化の丘フェスタ」の実施。

- ・ 期間：10 月 24 日～11 月 8 日
- ・ 全機関によるイベント：ムセイオン静岡の機関を巡るスタンプラリー（参加者 242 人）
- ・ スタンプラリーに合わせ各機関でイベントを開催。

県立美術館「第 2 回ロダンウィーク」、県立大学大学祭「剣祭」、県立中央図書館「大人のたしなみセミナー」、SPAC「中高生舞台芸術鑑賞事業」、「秋公演『室内』」、県埋蔵物文化財センター「考古学セミナー」、グランシップ「連続講座 静岡と山田長政がつなぐ書物」等。

昨年度に引き続き、様々な広報手段を活用し、県内外への広報を推進した。
さらに、地域の文化施設や商工会議所等との協働による具体的な広報を推進した。

広報活動

- ①ホームページ
- ②展覧会等イベント情報のマスコミへの資料提供
- ③ポスター、チラシの配布、駅貼り、車内吊り
- ④県広報課との連携（県民だより、県政番組、ラジオ番組出演）
- ⑤広報サポーターへの情報提供
- ⑥展覧会共催者（新聞社・テレビ局）、協賛者（清水銀行等）との連携
- ⑦美術館ニュース「アマリス」の発行
- ⑧県立美術館 Facebook から情報を発信し、口コミ機能を利用した広報を行うほか、大学生と連携した SNS 広報を展開
- ⑨Google Art のサイト上で、当館のコレクション画像 51 件及びロダン館ストリートビューを展示し PR

新たな広報

- ① グランシップ、SPAC、県立美術館、文化政策課で、「県有施設による文化振興推進会議」を発足し、広報に関する相互協力、3館を巡る文化ツアー企画、貸館相互協力等について作業部会を開催した。広報相互協力、各施設パンフレットを各館に配架する相互協力を実施した。なお、3館文化ツアーは、企画を旅行会社に提案したものの、商品化には至らなかった。
- ② グランシップの協力を得て、会報「GRANSHIP」への広告掲載、グランシップ友の会、県立美術館友の会会員への郵送物へのチラシ同封を企画展ごとに実施。
- ③ 「篠山紀信展」では、静岡鉄道・新静岡セノバの協力を得て、大型タペストリー等の展示、観覧券半券提示による飲食割引キャンペーン、篠山紀信トークショー・サイン会、鉄道との共通割引チケットの販売などを実施し、大きな広報効果があった。
- ④ 「篠山紀信展」では、共催の静岡第一テレビと協力し、割引券付チラシを新聞折込みで配布し、約 1,800 枚使用された。費用対効果をみながら今後の広報として検討する。
- ⑤ 「スイスデザイン」展では、デザインや国際文化に興味関心があると思われる学部の学生を対象に、大学の講義の中で企画の説明、チラシを配布するなどして PR を行った。
また、出展ブランドを取り扱う店舗において、観覧券半券提示でポストカードなどグッズをプレゼントするなどのキャンペーンを実施した。
- ⑥ 「ウィーン美術史美術館展」では、映画「黄金のアデーレ 名画の帰還」を上映した静岡シネギャラリーと協働し映画鑑賞後のアフタートーク、映画チケット半券で割引観覧券販売を行った。
また、協賛のウィーン在日代表部から提供を受けた、ウィーン市観光局ノベルティグッズを、1月2日の正月開館日に来館にプレゼントした。チラシ等で事前広報したため好評であった。
- ⑦ 「ウィーンからクリスマスプレゼント」と銘打ち 12月24日、25日の2日間、「キンダー・プ

ンシュ」というホットドリンクを先着 100 名に無料サービスした。26 年度は 1 月 2 日の正月開館日に「おしるこ」をサービスし、冬場のホットドリンク提供は好評を得た。

今後もドリンク提供の継続を検討する。

【平成 27 年度第三者評価委員での意見と対応状況】

〔1〕 達成目標等に対する二次評価

基本方針	意見	対応状況
A	会期途中でも他施設との連携等の工夫を機敏かつ柔軟に対応することが重要である。	全国の公立美術館をはじめとして、大学や学校及び地域との連携を積極的に行っており、今後も柔軟に連携を図っていく。
	日本平動物園との連携など、様々な工夫が「アニマルワールド展」の来館者が目標を上回った要因の一つである。	美術館に限らず、地域には文化施設、文化資源が多くあるので、今後も様々な連携を図ることで、相乗効果を得るよう努める。
	入館者サービスの一環として、Wi-Fi 環境を整え情報の送受信環境を向上すべきである。	ガイドアプリの開発に合わせ、Wi-Fi フリースポットの設置などスマートフォン利用環境を整備し、平成 28 年ロダンウィークに公開するよう準備を進めている。
	展覧会の内容や質を維持していくことも重要で、来館者目標を達成しなかったから悪いというものではないが、10 万人という数字は今後の目標の目安である。	平成 27 年度も様々な視点から展覧会を開催し、研究活動評価委員及び来館者から、その内容と質については高い評価を得た。引き続き、県民をはじめとする皆様に親しまれ、多くの方にご覧いただける展覧会を企画するよう努める。
	人口減少社会で、来館者も減っていくことは避けられない。もっと環境が悪くなるという前提で展覧会を計画すべきである。	若者、子どもといった様々な層をターゲットとした展覧会を実施していくよう努めている。平成 28 年度は、「美術館に行こう！ ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方」を開催し、利用者ニーズに応えるようにした。
B	地域や学校との連携は重要で、新しい取組や、将来の来館者に育つかという感触が得られるかも重要。数字では捉えられないものであるが、定性的に判断したら良い。	学校や大学等教育施設との連携を図り、様々な事業を行っている。しかし、人材育成には時間がかかるため、それを定性評価するのは容易ではない。評価方法については、検討したい。

C	外国人に対する戦略的な広報計画が必要である。	ホームページ等の広報媒体を多言語化することで、外国人にも興味を持ってもらえる工夫をすることを検討する。戦略的な広報計画については、専門家のアドバイスを聴取するなど、前向きに検討する。
D	今の建物の現実的な延命策を図るべきである。	建物の改修については、中長期計画を策定するべく検討する。
	美術館活動のあり方検討を踏まえた改修を計画すべきである。	館内の施設・環境整備委員会において、改修の検討のため勉強会を設置している。

〔2〕 県庁の支援体制に対する一次評価

意見	対応状況
大学にも美術館職員とともに営業活動を行うべきである。	今後も、静岡大学及び静岡県立大学との様々な連携を検討する。
2005年に静岡県立美術館評価委員会が提言した内容（戦略計画方式によるPDCAサイクルの定着や企画運営で館長を支える経営ボードの設置など）を再度検証してみる必要がある。	10年前に構築した評価システムが、現在の美術館を取り巻く環境に合致していないという問題がある。これについては、現在、文化政策課と美術館が共同で再検討に向けた検討を始めている。

平成 27 年度 設置者の取組状況

(1) 第 3 期文化振興基本計画の推進

平成 26 年 4 月策定の第 3 期文化振興基本計画において定めた美術館が果たすべき役割等について、美術館と協働して推進している。

(2) 美術館の企画運営会議への参画及び支援

- ・月 1 回開催されている美術館企画運営会議に文化政策課長が出席して情報共有を図るとともに、県として必要な支援を行った。
- ・美術館の広報委員会や施設環境整備委員会に職員が出席し、県庁が持つ広報媒体の情報提供や技術支援を行った。
- ・「県有施設による文化振興推進会議」を発足するなど、他の県立施設や周辺施設との連携を強化した。

(3) 中学生の美術館展覧会鑑賞推進事業の推進

中学生を対象とする鑑賞事業の実施にあたり、教育委員会を通じて県内の全中学校に趣旨や実施方法について情報提供するとともに、バスによる送迎業務を行った。

(4) 電気、機械設備の更新

経年化に伴い不具合が生じている電気、機械設備の更新を計画的に実施している。

内容に関する問合せ先

静岡県文化・観光部文化政策課

〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町9番6号

TEL 054-221-3506

静岡県立美術館総務課

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田53番2号

TEL 054-263-5755